

リリン子の絵日記のウルシ

うわああっ
きれいなお椀

これは
職人が
作った
漆の
お椀だよ

漆はウルシの木の
樹液を集めて作る塗料だよ。

1万2,600年前の
ウルシ木片(世界最古)

5,500年前の
ポシエツ

日本人と漆の付き合いは古く、
縄文時代から漆を育て、利用してきたんだ。



漆？

ウルシ入り

矢じりと木の
接着剤にも利用

漆掻きの道具



約50cm

約25cm

漆鎌

漆鉋

掻ペラ

エワリ

厚い樹皮を削り
傷をつけやすくする。

傷をつける。

しみ出た
液を集める



漆はウルシの木を
傷つけて分泌される
樹液を集めて作るよ

漆掻き

タカッポ(かきたる)

ホウキやシナノキの樹皮で
作る。漆を集めるタレ

ウルシ
(ウリ科ウルシ属)

リルや日陰に弱いウルシは、人間が下草
などを刈って、育てる必要がある。
種子を集めて発芽させ、
苗木も作っている。

苗畑で育てた
苗木を山に
植えかえて
約15年かけて
一升ビン位の太さ
まで成長させます。

漆掻きには専用の
道具が使われる。



特に形が複雑で
毎年交換が必要な漆鉋を作れる
鍛冶職人は青森の田子町にしかないんだ。



昔は実を
ロウリクに
したり、
代衣につめて
廊下を
磨いたり
してたよ。

漆掻きは6~11月に行われる。
 一人の職人が一年間に掻くウルシは300~400本。
 これを4グループずつ作業を進める。
 一日1グループずつ作業を進める。

漆掻き職人(掻き子)
 高齢化が進むが、
 国産漆の復興に
 とめない若い女性も!

① 下準備

下草を刈って風通しと
 日当たりを良くする。

これから
 傷つける木に
 激励の
 念を送る
 たのんぼよ

② 目立て(辺付け)
 (6月中旬)

傷をつけていく箇所に
 しるしをつける



約40cm

これで採取できる
 漆の量が決まる
 重要な仕事。



③ 辺掻き (6月下旬~9月下旬)

目立てでつけた
 傷の上に、前より
 少し長い傷を
 4日サイクルで
 つけていく。

前回つけた傷を
 治すため集まった
 樹液(漆)が
 しみ出してくる
 のを集める。
 「辺漆」



- 20回以上繰り返す
- ← 21日目
- ← 17日目
- ← 13日目
- ← 9日目
- ← 5日目
- ← 1日目 (目立て)

④ 裏目掻き (9月下旬~10月下旬)

辺掻きよりも
 長い、水平の掻傷
 をつけて
 漆をとる。
 「裏目漆」



⑤ 止掻き (10月下旬~11月中旬)

幹を一周する
 傷をつけて
 とどめをさす
 「止漆」



でも、ウルシは根萌芽力が強いから、
 翌春には根から新しい芽を出して、
 手入れをすれば10年位で次の漆がとれるよ。

こうして、
 漆を出した木は、冬の前に伐採される。

ものすごく
 貴重なんだね



5ヶ月かけて
 一本の木から
 とれる漆は、
 たった20gなんだ

漆の出方は、季節や天気、木毎に変化する。
 それを見極めて、無駄なく採るのは職人技だ。

木の状態
 を見極めて
 傷をつけ



漆の精製

大切に集められた漆は、使用目的に合わせて加工されるよ。

生漆

採集されたばかりの漆(荒味漆)からゴミを除いたもの

生漆のままでも下地用として使えるけど攪拌して全体をなめらかにするんだ。「ナヤシ」という作業だよ。

さらに熱を加えて水分をとばす。「クロメ」を行う。

色が変わって光沢が出てきたよ。



ガラス板に付けて肉持ちや透明感を確認する。

精製透漆

黒漆は、クロメの途中で鉄粉を入れて作るんだ

透漆に顔料を入れ、練り込んで様々な色漆ができる



色漆



縄文時代の土器



だから何千年前の器が残っているんだね！すごいっ！！

耐熱・耐温・抗菌作用も強く、室内ではパワフルな保護材なんだ。



さらに漆は一度乾くと酸やアルカリにとっても強い。



表面張力が大きいから天然塗料の中では最も平滑に広げられるんだよ。

こうして精製された漆は光の屈折率が高いので、深みのある光沢をもつ。

漆の文化

日本人はこうして漆の特性を生かして豊かな文化を育んできた。



国宝 中尊寺金色堂

全体に漆が塗られていたんだ

国宝 鹿苑寺(金閣)



国宝 阿修羅像

国宝 八橋時絵硯箱

見た目の美しさはもちろん、木の弱点をカバーできる漆は、神社や仏閣といった建物も守り、いろいろとてきたよ。

上塗り直後は、鏡のように模様を写す。

国宝 日光東照宮の修復

1636年に造営されて以来、数十年に一度の漆塗を繰り返すことで土台の木を守ってきた。



彩色部分の下地にも漆が

何重もの塗層を見ると先人達の技と思想が伝わります。



何よりすごいのは、漆は剥がして修理・復元ができるということだ。

江戸～昭和の修理で重ねられた漆膜の上に、新たに漆を重ねていく。



こんな裏側まで!?

神様と自分と次世代の職人が見ているからね。

次の修復まで保たせます。

傷みがはげしい部分は、漆を剥がして塗膜を進める。



欠けた部分も漆で接着!

漆を身近に

安価な外国産の漆によって衰退してきた国産漆。しかし、平成30年から、国宝や文化財の修復には原則100%、国産漆を使用することが決定した。



もとうルミを植えないと

掻き子の数も増やさなきゃ



漆産業は、守るべき伝統産業ではなく、攻めるべき産業に大転換しつつある。

数十年先の修復に向けて、若手の塗師を育てなければ！



弟子入ります！

木地師が加工した木の器(トチノキヤケヤキ等)に…



漆器は木や紙に漆を塗り重ねて作る。



あ、お椀！

そして漆は、国宝だけのものじゃない。



塗師が漆を塗って研いでを何度も繰り返す。

漆だけで厚みを作っていく。数ヶ月作業。



漆器は五感で感じる器。手触り、口当たりがふっくらやさしく、熱々の湯を入れても手に伝わるのはやわらかなぬくもり。



絵師により、装飾されるものも…

自分の器を育てよう。



漆器は使い続けると、キメが整えられ、色ツヤが増してくるよ。

